

おめでとう 高円宮杯で全国5位に

去る11月27日から東京都の有楽町ホールで行われた第77回高円宮杯全日本中学校英語弁論大会に2年生の稲津陽向さんが長崎県代表として出場し、決勝大会にコマを進め、見事、全国5位に輝きました。2か月ほど前から、部活動や学習と両立しながら練習に励み、その成果を発揮したことは本当に素晴らしいことです。音声表現もさることながら、着想や話の組み立てに感心します。稲津さんの原稿を紹介します。

はんぶんこ

「はんぶんこなんて、大嫌い!」
子どもの頃、私はそう思っていた。おやつも、注目も、愛情も、全て分け合ってきたからだ。私にとって「分け合う」とは、奪われること、我慢することだった。だから、何も分けずに独り占めできる友だちが羨ましくてたまらなかった。きょうだいとは、私にとってただの「ライバル」だった。

私には2歳年上の姉がいる。名前はさや。さやは頭がいいし、足も速い。彼女は英語も得意で、テニスも上手。誰とでも仲良くなれる。彼女はいつも私の前を歩いた。小学校に入学したとき、周囲は私のことをこう呼んだー「さやの妹」。最初は、みんなが私をすぐに覚えてくれたからとても嬉しかった。でもいつしか周囲は私の名前を言わなくなった。まるで自分の名前を失ったみたいだった。私にとって、妹というのはいつも「2番目」。何事にも負けたくなかった。姉に勝てる何かがほしかった。私は「陽向」なのだ。

だから私は心に決めた。私は姉とは違う中学校に進学し、姉と同じテニス部に入部し、姉を超えるために全力でラケットを振った。私の情熱はすべて「姉に勝つ」という思いに注がれていた。

今年の夏、私はアメリカのミネソタ州セントポールで、人生を変える出会いをした。セントポールは長崎初の姉妹都市、70年にわたって友情を育ててきた街。私は考えた。「漢字の「姉妹都市」の「姉」と「妹」というのは、どちらが上でどちらが下なのだろうか。さやと私のようにライバルとして張り合う関係なのだろうか。」

けれども、それは全くもって違っていた。
私の滞在先のホストファミリーは、出会ったばかりの私を本当の家族のように迎えてくれた。おやつを分け合い、笑い合い、心を通わせた。そのとき私は胸を打たれた。

「分け合う」というのは、何かが半分になることじゃない。
「分け合う」というのは、相手を大切に思う気持ちを伝えること。

「分け合う」というのは、つながりを生み、喜びを倍にしていること。

「はんぶんこ」は奪うことなんかじゃない。愛を広げることなのだ。私は初めて、「はんぶんこ」の本当の意味に気づいた。その瞬間、姉への思いも変わった。ずっと超えたいと願ったライバル。けれども本当は、姉という存在が私を成長させてくれたのだ。きょうだいとは、競い合う相手ではなく、共に生き、支え合う存在なのだ。

今、世界には争いと分断があふれている。分け合えば心はつながるはずなのに、奪い合うことに必死になり、互いを傷つけ合っている。

長崎出身の歌手、MISIAさんの「はんぶんこ」という歌の歌詞に、こうある。

「はんぶんこにしてみよう やさしくなれる」
「はんぶんこにしてみよう たえばヨロコビ、ウレシイは倍になるから」

私はこの歌詞がずっと、そして深く深く心に染みだ。「はんぶんこ」は世界を変える情熱のことば。私はこの情熱のことばを、そしてその意味を、これから世界を担う子供たちに伝えたい。権力でも富でもない、人と人とが「はんぶんこ」でつながる未来を目指して。

Hambunko

"I hate sharing!"

That's what I used

to think when I was a child. Everything — snacks, attention, love — was always divided. For me, "sharing" meant losing out, having to compromise. I envied those who could have things all to themselves. To me, my siblings were just "rivals."

I have a sister two years older than me. Her name is Saya. She's smart, runs fast, and she's also good at English and playing tennis. She makes friends easily with anyone.

She was always one step ahead of me. When I entered elementary school, people called me "Saya's little sister." At first, I was happy because everyone knew me. But then, they stopped using my name. It was like I'd lost my identity. As the younger sister, I've always been "second." I never wanted to come in second place at anything. I longed for something that was mine — something where I could finally outshine my sister. I am HINATA.

So, I decided I would go to a different junior high school but join the same tennis club to surpass her. All my passion was focused on winning against her.

This summer, I had a life-changing experience in St. Paul, Minnesota, America. St. Paul is Nagasaki's sister city, a place that has extended friendship for 70 years. "Sister city" in Japanese uses the kanji for older sister and younger sister, so I wondered, "which city is the "older sister" or the "younger sister"? Are they rivals, like Saya and me?"

However, I was completely wrong.

In America, my host family welcomed me like I was one of their own daughters. We shared snacks together, laughed together, and connected on a deeper level. That small act truly moved me.

"Sharing" is not about dividing things.

"Sharing" is about showing you care.

"Sharing" is about building connections and doubling joy.

It's not about taking away. It's about spreading love. I finally realized the true meaning of "sharing". My feelings for my sister changed too. My rival, the one I always wanted to beat. The truth is, she helped me grow. My siblings are not just competitors. They are people who live and support each other.

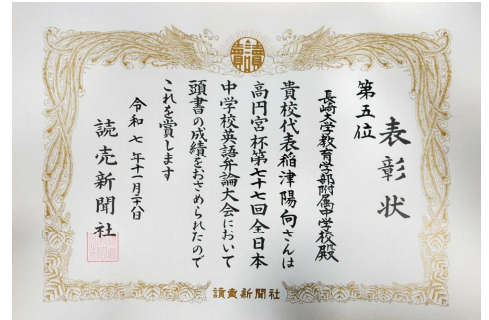
Today, the world is full of conflict and division. Sharing should be about connecting minds. However we fight over things, hurting each other.

There's a song called "Hambunko" by MISIA, a singer from Nagasaki, that says:

"Let's share it, we can be kind."

"Let's share it, like happiness — it doubles."

The lyrics of this song sank into my heart — quietly, yet deeply. Sharing is a passionate word that has the power to change the world. I want to pass on this passion, and the meaning behind it, to the children who will shape the future of our world. A future where people are connected not by power, not by wealth, but by "hambunko" — the simple act of sharing with one another.



おめでとう

部活動の成績や、学校を通して出品した作品等に係る表彰について御紹介します。

高円宮杯第77回全日本中学校英語弁論大会決勝大会（11/28、有楽町よみうりホール）

第5位 稲津陽向 演題「Hambunko(はんぶんこ)」

第18回長崎県中学校バドミントン新人セカンド大会（12/6、諫早市中央体育館）

〈男子団体の部〉第3位 岩瀬功汰 世知原匡人 立山龍太 種岡朋哉 三浦清聖 大田颯人
上野遙人

※1月10、11日に開催される長崎県中学校新人大会に出場します。

776号～778号記念特別企画 その3



特別企画最終回となりました。78回生の作文を掲載いたします。1年生の「Now」をどうぞお読みください。

入学から半年。この附属中でたくさんの人に出会い、大切な時間を過ごしている。日々の生活の中で多くの刺激を受け、多方面において成長することができた。特に、ものごとを客観的に見ることができるようになったと感じている。

私は、入学してから「小さなことでも一生懸命に」を一つの目標として取り組んできた。勉強、部活動、礼儀、時間の使い方など、それは様々な面で生きている。その一環として、毎日、「生活の記録」の3行を埋める、ということを私はずっと大切に行っている。それにより、その日の簡単な総括ができると同時に、学びの軌跡を残すことができるようになった。そこに書いた学びの軌跡は学習面だけでなく、「〇〇をする意味」や「しなくてはならない理由」など、生活の中にあることがらに対する自分なりの考えや答えを探し出す機会にもなっている。小さなことでも文字に起こすことで、「言葉が人をつくる」という言葉の意味を理解するきっかけとなった。日々の小さな気づきを軌跡として積み重ねることで、小さな背伸びがやがて大きな背伸びとなり、新しい発見のある"生きている時間"を過ごせているように感じている。これは、入学当初と比べて大きく成長した点だと思う。



私は、長大附属中という場所で変わりたかったから努力をし、受験を経て、ここにいる。なりたいと思っていた自身の理想を現実にし、過去の受験生の自分に、附属中で過ごせてよかったと胸を張って話せるような時を、この先、この場所で過ごしていきたい。

1年4組 水本爽さん

1月の予定



1日（木） 元日
～7日（水） 冬休み、学校閉庁期間
8日（木） 授業開始日
9日（金） 本校入試会場設営 11:20完全下校
～14日（水） 部活動中止（本校入試のため）
10日（土） 本校での部活動中止
11日（日） 本校入試

12日（月） 成人の日
13日（火） 3時間授業
15日（木） 実行部会
22日（木） 生徒総会
27日（火） 公立高特別選抜
29日（木） 整形外科健康相談（希望者）